

會



報

1954年11月

176

日本山岳會

立派な遠征隊

サー・ジョン・ハントの「アセント・オブ・エヴェレスト」が刊行されて一年、邦譯「エヴェレスト登頂」が上梓されて半歳になる原書、邦譯を手にした當時、胸を躍らせながら貧るように讀耽つてから、しばらく日がたつた。近頃また、稍うすれた感銘を取戻すべく再讀してみると、色々と考えさせられることが多くない。

一九五一年シブトン隊の偵察行一九五二年チヨ・オユウ試登、同じ五二年春のスイス隊の業績などを脱合せ、A・CとR・G・Sとの合同ヒマラヤ委員會が、一九五三年度ヒマラヤ委員會へ遠征隊を送るに決定して、先づ最初に行つたのは、遠征隊長の指名選任であつた。遠征全體の中心である隊長が一番にきまり、それから總てが動き始めるのである。

一九五二年九月十一日に遠征隊長としての招電を受けたハントが軍務を離れて、ロンドンに到着したのは十月八日。この間にも組織委員が指名され、装具などについて豫備的な仕事は着々と進められていた(譯書二九頁)のであるがロンドンへ着いた翌日から、隊長が遠征の中心となつて、全般を把握していつたことは、附録一、組織(一九五二年十月九日から實施)の圖表によつても明らかに看取される。本隊の乗船出發まで約四ヶ

月、隊長自身の空路出發まで約五ヶ月の餘裕があつたが、恐らくこれでも轉手古舞の仕通しであつたろう。

隊長にとつて、何よりも緊急を要することの一つは隊長の人選だつた(三〇)と書いているが、大體出來上つた隊の上置きに、後から選ばれた隊長が載つてゆくことなどは、筋が通らないことだから、自分の率いてゆく隊員を隊長が選ぶというのは、極めて常識的であるといふべきだらう。

一九五一年の偵察及びチヨ・オユウ遠征の隊員達、A・C以外の各山岳會からの推薦候補者、全國からの參加申込者など数多い中から、十人の登攀隊員、醫師一人を選ぶという難問を、僅か三週間の短かい間に解決するため、ハントがいかに苦勞したかは察するに餘りあるが、十一月一日までに隊員は決定、その名簿は七日にヒマラヤ委員會に提出された(三四)。

隊員の最終決定に當つて、求められた條件は四つ、即ち年齢、氣質、經驗および體力である(三一)。「そして私はチームの全員がサミッター即ち、頂上攻撃の資格のあるものであつて欲しいと考へた」といつているのは傾聴に値する。

事實、登攀隊員にテンジンを加えた十一名は、殆んどみなサミッターの資格をもつていたと言つてもよく、第一次、第二次の攻撃隊員は、現地で既に第六キャンプが設置された五月七日になつて、指名決定された(一六四)中、からも、また登攀隊員十一名の中、サウスコルに達したものは九人の多

きに上り、そのうち三人は、二度もコルに登り、コルに達した九人のうちで、七人は南東山稜上二七〇〇呎の高度に達し、四人は二八七〇呎のサウス・サミットに登り、二人が登頂した(二七六)ことから、この遠征隊がいかに充實した力を持つて、地球上の最高點にぶつかつていつたか窺われるのである。

隊長ハント自身が、ベイス・キャンプはるか、アドヴァンス・ベイスにも留らず、サウスコルから更に第二次攻撃隊の第九キャンプ(二七九〇呎)設営のために、テント、食糧、ケロシン等四十五ポンドの荷を、二七三五〇呎の高所にまで運び上げた(二三三)ことは、特筆すべきであらう。出發前に「……あなたの登頂用キャンプは、ずつと高く上げ給へ……」というノートからの助言、「この最高キャンプを、特に隊長自身の重大な責任と考えるように……」というロングスタッフの提言(四四)を、文字通り彼は實踐した譯である。

第一次攻撃隊をエスコートしてサウスコルから下降するに當つて第二次攻撃隊のヒラリーに「若し避けられるなら敗退しないように、また支援隊は必ず派遣すると約束して」(二三三)この隊長は陣頭指揮(イヤな文句だが)の役目をも決して忘れてはいない。ブルース、ラットレッヂが遠征隊を率いて出かけた頃とは、敢てエヴェレストといわず、ヒマラヤのジャイアントに挑む遠征隊のリーダーの性格が、大きく變つてきたことは見逃せないと思う。

この遠征計畫が發表されると、各方面から珍案、名案、奇案の數々が寄せられ、遠征がA・CやR・G・Sだけのものでなく、全國的に廣く深い關心の對象となつたことがよく分かる。いろいろの提案が、兒戯に類するものとして一蹴されることもなく、或るものは實驗まで行われたことが、幾分のヒューマニティーを交えて記されてあるもの(四八、五四)、隊長であるまた著者であるサー・ハントの善意を反映して、われわれに微笑ましい感じを與えてくれる。

「アセント・オブ・エヴェレスト」は僅か一ヶ月間に書き上げられたと著者は語っているが(タイムズ文藝附録一九五三年十一月十三日付)これは確かに超人的といひ得る。しかも出來上つたのは、どこからみてもソツのない、完璧というより外に評しようのないものである。タイムズの記者は、サー・ジョン・ハントは山登りも達者だが、話も上手である、本が出てみると話も上手だが、書くこともまた達者だといふことが分ると、評しているが、その通りである。

三十何年一々の懸案を解決し、二十世紀の一つのビッグ・イヴेंटを成就しながら、尚ほ第十八章反省の項を付け加えるのを忘れない、謙虚な態度も流石、心憎いほどである。この反省の章が報告書に、どれほど重みを加えているかは言うまでもなからう。

附録の各項が、幸いところに手の届くやうに記述され、殊に附録八、遠征後援者の挨拶など、實に行届いた、禮をつくしたもので

(九頁五段目につゞく)

宇治長次郎と 大山村の人達

冠 松次郎

久しく氣にかかつていた長次郎の安否について、この間彼の甥にあたる宇治信一に問い合せたところ、長治郎は昭和二十年の十月に七十二歳で死んだと云う返事が来た。

私たちの連れて行つた大山村の人達の年長者は、今日では皆いなくなつた。僅に岩魚釣の上手な山田竹次郎が七十二歳で健在だと云うだけで誠に淋しい氣持がする。

長次郎は今生きていれば八十歳を越えている筈で、小島、木暮兩先輩と同じ年だと憶えている。太平洋戦争の始る少し前までは夏になると立山の天狗平の小屋で手傳いをしていたことは知つていたが、その後は私もあの方面へは行かないので氣にながらも彼の消息を知らなかった。

上背のある人柄のよい、始終にこにこしながら人に接する彼を思うと、何となくなつかしい味を感じる。立山の雪、剣の岩、黒部の廊下など、彼とともに私の追憶から離れたい。彼は滅多に頑張らない。猪突というような言葉は彼の行動にはあてはまらないであらう。嶮岨を前

にして悠揚迫らず、その暢達の體軀を以て地物を極度に利用し、手際よくこなして行く山登りの技術は實に見事である。

激流でも、岩場でも、彼の前に自然と道が拓かれていくように見える。その柔軟な體軀は悪い岩肌

に吸いついて行くようだ。兩手を上へ押しながら、かぶつた岩に抱きついて行く彼は、ヤモリに似ているといわれている。

決して無理をしない。見込のない處を押し進むことはしない。それだから彼の行くところへは安心してついて行ける。その代りに彼が「行けんちゃー」とい

つたら、先づそこは前進を諦めなければならぬ。とにかく愉快な山の仲間であつた。あまり無駄口をたたかない。彼のほしやぎだすのは愈々自然が雄大となり、峻嶒が踵を接するよう

な時である。こういう時の彼のクセははな歌を唄うことだ。大事な處を行くときには、彼は黙々として後からついてくるが、惡場にかかると頃になると何時の間にか

先頭を切つていく。そして譯の分らない歌を唄いながらゆつくりと進んで行く。その歩度が遅いように實に速い。

嘉門次などもそうであつたが、部下を非常にいたわる。御客は勿論大切にしますが、連れて行く山の人達を一人一人大事にして行く。それだから皆彼のいうことをよくきく。期せずして行動が一致し行程が捗るのである。

彼はまた山相を案ずるのにすばらしい感覺をもっている。自分の初めての山でもひと眼でそれはどこが悪いか、どこからなら行けるかをよく判断する。尾根で野營を

つたり、大木へ登つたりしてない。そして暇を見ては珍妙な山のスケッチをしている。それが後日随分役に立つ。彼のまだ入つていないような處を、どうしてよく知

つていふのかと思う。彼は惡場でも一歩一歩頭腦で道を拓いて行くか見える。とにかく山の人としては山に對する時だけかもしれない。

二十歳前から常願寺川の荒瀬で鍛え、陸地測量部の人の手足となつて、立山、剣、黒部、別山、仙

た。

劔澤から黒部別山の頂まであの重い三角點の石標を、金作と助け合いながら持ち上げた時には實にえらかつたという。仙人山の上では、恰度頂上へ登つたとたんに大きな熊と鉢合せしうになつた。距離は僅か二間位しかなかつた。驚いてそつと後ずさりをして岩陰

にかくれた。熊も氣がついたらしいが、こちらに敵意のないのに氣づいたので、悠々と歩きながら反對の側へ降つて行つた。

ほつとして頂上立つて、熊の降りて行つた谷の方を見ると、その熊が雪上をどどんと飛んで逃げて行くのが見えた。熊もよほど怖かつたと見える。しかし負惜みの強い獣は、人の見える處ではわざとゆつくり歩いて、決して弱味を見せないが、少し遠のくと飛んで逃げて行くのである。

私も黒部では随分長次郎達の協力を得た。實を云うと、私も長次郎も、勿論その他の者も、一人として黒部の廊下を知っている者はなかつた。その知らない者同志が道連れになつて、激流と闘い、岩壁に挑み、しかし氣ままにのんびりと黒部全流を探索した。危険も相當あつたがまた實に愉快な、そして贅澤な谷渉りでもあつた。

日でも忘れられないものだ。

「人の見ん處を見んにやー」と野口が云う。

棒飛で谷を涉つていた彼は何時の間にか見えなくなつた。それは劔澤の大瀑布二〇〇米の龍壺に初めて入つた時だつた。彼は私にその龍の下まで見に行つて歸つて來たのだ。

どうだ先の様子は、と聞くと「えらい處ぢや！ なのはやあー」と感嘆している。一行が龍壺のすぐ下手まで行くと冠り氣持の大きな岩の洞にぶつ

かつた。どうして登ろうかと思つて上の方を見ると、黒い紐が岩の間から下つていく。あゝ！ こんなものが不思議に思つた。まさか上流からこまで流れてくる筈はないので、野口に聞くと、龍を見た歸りに掛けておいたのだと笑つて答えた。随分これが役に立つた。なかなか細かく頭を使う男だと思つた。

長次郎や米谷長次郎、野口松次郎、山田竹次郎などと云う老巧者が皆一緒になつて嶮岨に道を求めて、じりじりと劔澤の神秘境に迫つて行つた。

饒舌で滑稽味をもつてしかも山にも谷にも強かつた男に宮本金作がいた。彼は長次郎と共に早くから陸地測量部の人について立山、

測量部の柴崎氏と共に長次郎谷を登つて劔の頂に達した。その後日本山岳會の石崎、河合、吉田の三氏が長次郎達と登山人として最初に劔を極めた。長次郎谷の名はその時につけられたのであるが、

この谷を登つたのは長次郎よりも金作の方が二、三年早かつた譯である。

平蔵谷の方は大正三年(一)日本山岳會員近藤茂吉氏が長次郎と平蔵を伴つて山の頂から別山尾根を通つたその時には長次郎が初めて平蔵谷を行つたので、大正四年私は平蔵と共に登山人として初めて平蔵谷を降つた。それだから長次郎谷を最初に登つたのは金作で、平蔵谷を最初に降つたのは長次郎である。

京都の今西、西堀氏一行が薬師岳の頂のカルから黒部の上廊下へ降つたとき金作がその先導役をつとめた。これの最初の下降であつた。金作は大山村の年長者の中では一番早く死んでしまつた。それで私は彼の名を黒部に長くともめたいと思つてこの谷を金作谷と名づけた。この谷は薬師岳と北薬師との東面下にある二つの大きなカルルの水を集めて上廊下の中央部にナギ込んでゐる恐らく上廊下中での最も立派な支流であると思ふ。

それにしてもあの探検の頃の涙ぐましい努力、それに伴つて得た成果と喜び、それはある意味から云うと黒部と云う大きな自然境を舞臺として演じられた、山のひとと私たちの融合した探検劇であつたと云える。

彼等は私たちと手を携えてどこまでも突き進んで行く、離すことの出来ない仲間である。決して金で頼んだ者とは思えない位眞摯でありまた親切であつた。村の青木は身長六尺の巨漢だ。村の

相撲ではいつも大關だと云う。七十貫の石を背負つて歩いた剛の者だ。それでいて無口で當りが非常に軟い、お世辭こそないが親切なよい人柄の男だ。山本の方は身軽な、どちらかと云えば小さくて敏捷の方だ。ツルツルの巨岩のなりの傾斜面を、素足で平地を駆けのように飛んで行く。私たちは狼のように動作を行くから見て手を叩いて喜んだことがある。

重い荷を軽々と背負つた青木と山本とが先登をきつて颯爽として進んで行くのを見ると私たちの計畫が既に成功したかのような安心が感ぜられた。

いざ惡場にかかるかと長次郎のはな歌が始まる。野口の堅實な足どりが悪い岩場をへつり抜ける、橋を架けるときの動作など、まるで現地一度練習しておいたもののようだ。

決して無理をしない。本當の惡場にかかること一日に三、四丁しか前進しないこともある。後は前方の様子を見に行く。残つてゐる者はよい泊場を造り天幕を張る。そして皆安樂なまどいをする。

ゆつくり寝て澤山食べて、ゆるゆると原始境を探る。無理をしないから怪我も少い。それでいて目的はよく達せられる。行く先々の自然の様をよく観察することが出来る。非常に不経済のようで反對に効果的であり頗る歡樂に満ちた山旅をすることが出来る。

私はこう云う楽しかつた山旅を追憶するにつけ、これらの山の到達に對して深い感謝をするものである。

各国遠征隊の動向

ガシヤールムI(八〇六八米)
ドイツ隊(隊長 Dr. Karl M. Herbigkoffen)

四月の末にイタリアのK隊と一緒に出發する筈であつた一行は洪水で被害者が澤山出たため資金がなかなかに集まらず、外電によると七月十八日頃、隊長はあと十萬マール(八三〇〇〇磅)入要だといつてゐた。それでも八月十日にはどうやらミュンヘンを出ることが出来たらしい。

ラカボシー(七七八八米) 他
獨逸隊(隊長 Mathias Rebisch)

一行は四月二十八日にミュンヘンを出發、五月十二日カラチに上陸、それからギルギット河に入りピルグイゼル博士はパツラ河水域で活躍した。クラメルトはバグロト谷を踏査したがラカボシーは失敗したようだ。
隊長レビッチはフンザ河の支谷トータ・ウンス(Totajuns)に入り、パツラと分水嶺上ククアイ(Kukuan)氷河の附近で七千米級の登頂に成功したという。之がフンザブルムと命名された山である。

パツラ及びククアイ兩氷河の源頭にある七千米級という二、三、四三〇呎(七一四二米)北緯三六度三七分三二秒、東經七四度一九分一〇秒——とある山しかない。それとすればカラコルム協議會の作成(一九三九年)した地圖(七五萬分ノ一)を見てわかつ

る通りカンピール・デイオール(Kampee Dior)以外のものではあり得ない。この名稱については面白い傳説があるが長くなるので略しておく。意味は公老婆の家である。西側にあるカンパール氷河(Karamba)の源頭に當るところからカンパール峰ともいわれ、カラコルムの中では一番西にある七千米突級である。ティルマン著「二山一河」Two Mountains and a Riverの〇一頁にある略圖を見ると、インド測量局の地圖も、カラコルム協議會の地圖も實際と相違していることがわかる。(後者は少し許りであるが)

尚この山から南東に走りフンザ河に終る山脈(パツラ・ムズタ)の大部分にはフンザ・クンジのIからVまでの他に七千米級がまだ一つある(DK 5421)。前に戻つて、レビッチ隊は何處かわからないが六二九一米のキャンプで奇妙な現象を見たという。直ぐに消えてしまつたがそれは各々の色の明瞭に現われた紅の輪影があつた。アルプスの傳説に幻とそれを見た人は翌日死ぬことになつてゐる。それからあらか遠征隊はそれから當分は無事であつたが、一ヶ月後にヘックラー(Karl Hechler)がフンザ河の崖縁で寫眞をとつてゐた時、寄りかかつていた岩が崩れて遂に河中に轉落、溺死してしまつたという。(吉澤一郎)

山上展望

昨年十月會報一六九號と共に配布された「當番制復活について」という刷物に山岳會のルームが一部會員の云う「山の話をしてない土曜會」の様なものでなくという字句があつた。それまでもよく土曜日に落合つたことはあつても、土曜會なるものが組織されたこともなく、どういう理由で常任理事一同の名に於て、槍玉に上げられたのか、解し兼ねた人もあつたらしい。その上、JACがクラブである以上、時には山に無關係な話が出るのも當然のことだから「山の話をしてない」けうなのは、以つての外と極めつけられて、呆氣にとられた人もあつた。

その後、前に引用した字句が穩當を缺くという聲もあつたが、最近一七五號に添付された「十一月當番表」の餘白をみると「昨秋會報に折込んだ常務理事一同でしては取消し致します」と附記してある。取消の理由は不明であるが、常任理事一同の意見が、一ヶ年の経過によつて、變化を來したのもと思はれる。

これからは山岳會のルームで、山に縁のない四方山話に耽つてもお咎めはあるまい(按針生)

白樺山莊

都内の山小屋 庭の白樺林
展望可交通便 地圖案内呈
登山家の會合 簡易宿泊に
澁谷區代々木 山谷二三三
京王初台三分 廣瀬深邸内

界無比の國柄と教えられていた割には文化國ではなかつたのであると云うことだつた。

私は二つのカムチャツカ探検誌のこのために山岳會報を一號から通讀して山岳會五十年の歴史の後半二十五年間の會の動きを省みることが出来て面白かつた。昭和五年會報が創刊されたこの年に丁度私も入會したのであり、私には私なりに特に感銘があつた。このことは別としても會報合本は時々ある。私などは「役にもたぬ山岳會員」であることには相違ないが私にとっては「役にたつた山岳會報」であることには間違いない。

私は登山などは他人にも、子供にも奨めない。たゞ登山の相談には私の経験や知識を出るだけであつただけである。私に相談した人はたいてい登山後には心構や準備について大仰にすぎるといふような感じをうけるらしい。私はしかしそれでよいと思つてゐる。確かに例えれば私が慎重に考えた剣岳仙人谷なんかの夏場は、踏跡や他の登山者のあとについて歩けば簡単なことに思ふ。だが山の持つ危険はそれ程減少したとは思われない。熊が少なくなつた位のものであろう。

心なく汚したり破いたりされることを嫌つて、山岳書やアルバムを觀ることをせがむ長男に中學に入學したとき全部讀ることを約束に禁じてあつた閱覽を、今春から

解かねばならぬことになつた。早速く引つ張り出した長谷川傳次郎氏の「ヒマラヤの旅」はその老大な大きさと重さのために忽ちこわれてしまつた。矢張り十二歳の中學生にはヒマラヤは重すぎたのである。

私は年少のとき始めての登山に立山に登つた。その年に板倉さんが遭難死され、冬でも山に登ることが出来、登る人のあることを知つてますます熱をあげたわけであるが、私は子供に特別獎勵しようとは思われない。二、三年前子供をつれて彌陀ヶ原に登つた。單調な長い稱名の谷、雨の中の下山などで大した感銘もうけなかつたようだ。稱名小舎に泊つた夜、あの谷川が夜半にこちらに流れを變えて小舎が流失しないかと心配しだして當惑させられた。幼時に窮迫と共に育つた子供には、杉田のおぼさんが炊いて下さつた栗飯や土産の山ブドウの方が餘程喜しかつたらしい。この子供は將來山にどんな關心を持つだろうか。山はいつも眼前にそびえたいつにスキーをそれ以外にはないようたスキーをやる。映畫「エベレスト征服」を觀ての感想は大したことにはなかつたような話ぶりでこの親馬鹿は内心がつかりもし物つともしているのである。(三九・一〇)



喘ぎ登る。(中略)かくして零時四十分幾年焦れに焦れたわが思いは遂に達せられた。頂上零下二十一度。

と東條氏はその報告中に述べてゐる。番所へは四時五十分歸着。歸途白骨温泉で一泊。安房を越して平湯に泊り、安房峠から焼岳への尾根にとりつき苦心の末大正池から上高地に出て徳本峠を越えてゐる。

◇槍ヶ岳北鎌尾根の登攀
大正十一年の計畫をみるとまず五月に船田、小笠原、大井の三名が再度槍ヶ岳登攀を行つてゐる。今回は上高地から槍澤小屋に至りここから往復してゐるが、五月二十一日の槍に登つた日には南岳で足を伸ばしている。夏期計畫は北アへ五隊、その他鹽見・小河内・赤石縦走、八海山・中ノ岳、鋸岳、北海道などで参加人員は延五十八名。北アの計畫の中には小笠原、書上兩名が島山喜作を伴ひ殺生小屋を基點に穂高を縦走して上高地に出、中尾を越え、蒲田より穴毛谷から笠に登り引返して双六から薬師に縦走、黒部に下つて雲の平に出、黒岳に登り割物澤を下降して湯原、水俣、葛という記録的なものもある。穂高縦走として「リュックサック」にのつたのはこれが最初で、そのほか土屋、鈴木兩名は高瀬入り、硫黄澤より双六岳に出ている。

また特別班として船田、麻生の二名が七月五日北鎌尾根二九〇七米峰までの往復を行つたのもこの年で「リュックサック」二號には「鎗の北鎌尾根」と題し船田氏がこの速報をのせているがこの中で

船田氏は「再び鎗の頂に友と共にだきあつて立つた時は眼も眩むような感激にベルグ・ハイルを叫んだ」と述べてゐる。ロープは二百フィートの一・四インチ(周圍)木綿綱を使用とある。この正式報告は第四號の「北鎌尾根の追憶」にくわしく記されているが、この登攀はすでに一般にも知れているから詳細を述べることは止める。

◇剣岳スキー登山の記録

剣岳の積雪期初登攀は大正十一年四月慶應の三田氏によるものであるが、これはその第二登の記録である。メンバーは船田三郎、大井正三郎、澤田武太郎(帝大)の三名に案内として佐伯八郎、ほか二名のボーダーを伴う。大正十二年三月二十七日藤橋を出發し材木坂を経て桑谷で雪中露營、二十八日も好天、室堂に至り、二十九日は滞在。快晴の三十日五時三十分室堂發、乗越近くをスキー・デポとして輪標に代える。別山乗越八時十分、別山尾根づたいに八郎、澤田、大井、船田の順でアンザイレン、零時半平藏谷の頂に着く。

「いよいよ岩傳いの登りが始まる。輪標のまゝ岩を攀つたりしたので思ひのほか時間を費してしまつた。二時鐘れし劍の絶嶺にわれわれは歡喜の聲をあげた。四等三角點は雪に埋れ一尺ばかり表面に現われているに過ぎない」と三月の劍岳の中で大井氏は書いてゐる。歸路は平藏谷を下降、月光を浴びて九時十分室堂に戻つてゐる。三十一日も快晴で雄山に登る。

(つづく)

カワミヤのアルパインソール

耐久・不磨耗・滑止

あらゆる点で NO 1

合資会社 代表 平林 三郎

カワミヤ靴店

東京都大田区大森 8-3740

TEL (76) 5882



高所用露營天幕

登山とスキー用具

千代田區神田 須田町 2-23 細野商店 電話(25)6428

アビー遠征隊（一九五四年）の顛末

——溺死・登頂・凍死・行衛不明・完結——の記録

吉澤一郎

K²はデジョオの率いるイタリイ隊によつてこの七月三十一日に完登された。然しネパール・ヒマラヤにおいて七千米以上の山がイタリイ隊によつて頂上まで登られたのは、假令その前後に大きな犠牲が拂われたとはいへ、今度のギリオネ隊が最初である。パンジャブ・ヒマラヤにおいては一九一三年に既にピアツェンツァ隊がクーン（七、〇八六米）に登つてゐる『アビー、ナンパ、サイパルの山群はネパールの最西端、チベットとインドのガルワールに接した地域に聳え、ネパール領内にあつたが故に、今までは比較的知るところの少なかつた山々である。古いところでは一八九九年にサベジ・ランドル（A. Henry Savage-Landor）が、ガルワール側から査証なしで國境を越え、アビールの北西側を探つてゐる。彼の著した（一九〇五年）『Tibet and Nepal』は寫眞の代りに彼の描いた原色や白黒の繪が澤山挿入してあつて仲々面白いのであるが、年月日は疎すつぽ書いてないし、可なりの誇張も見えるようである。然しネパールでは、夜になつて村へ入る時には、必ず一人先行せよ、などという参考になるようなことも述べてゐる。

一九〇五年に同じところを歩いてゐるロングスタッフ（Tom George Longstaff）の『This My

Voyage』によると、ランドルの立てた最高ケルンの位置は僅かに五、〇三〇米で、アビー（ランドルはランパ『Lumpa』といつてゐる）に登つたということが直赤な嘘であることがよく解る。こゝに私が書いた『假の概念圖』はH.J.XV(1949)にあるリソン（Francis Leeson, 米國人）のものその他の地圖とを參考にして出来上つたものであるが、決して正確なものでないことをお断りしておく。

さて、まだ詳細のことはわからないが、色々の事件の取り交ぜてあるギリオネ隊の顛末を一應御報告しておく。

① ギョロ・ギリオネ（Ing. Piero Ghiglione, 七一）

トリノの新聞の特派記者で、世界中を股にかけて歩いてゐる。日本に來たことのあるのは既に御承知の筈。私は帝國ホテルで彼と山の話をやつたことがある。非常に小さな人であつた。ディレンフルトの遠征隊に参加して、アンドレ・ロツク等と共に一九三四年にカラコルムへ行き、シア・カンリ中央峰（七、三二五米）とバルトロ・カンリ東峰（七、二六〇米）に登つてゐる。今年が七一歳だとすると當時は五一歳という勘定になる。南米では戦前戦後を通じてよく登つており、一九五二年

には今年カラコルム西部へ入つたマチアス・レビツチなどとベル・アンデスの未登峰を登つてゐる。『Berge der We It' or "Mountain World", 1953 参照）一九五三年度の分は前號で紹介済み。

② 登頂後行衛不明のギウゼツ・バレンギー（Giuseppe Barrighi, 三三）

之は経歴不明。

③ 下山の途中凍死、ギオルギオ・ローゼンクランツ（Dr. Gior gio Rosenkranz, 三三）

④ 山にかゝる前に溺死、ローベルト・ヨナミ（Roberto Bignami, 二六）

今年K²に行つたボナツティ（Walter Bonatti）と共にフルッケン・グラート（Furgengrat, Matterhorn）の冬期初登攀と、ビツク・パリュエの北壁に新ルートを開拓したので有名な登山家。サンプは以上の四人であるが、ヒマラヤの経験者はギリオネだけ。

⑤ 連絡係としてブリー中尉（Y.R. Puri, 二五）六、四〇〇米まで登る。

中尉はダーラムサラのグルカ中央訓練所に所屬し、インド陸軍冬期戦術学校のスキー教官として勤務してゐた。

シェルパについて

登頂者、ギヤルゲン・ノルブ（Gyalgen Norbu）

之はJelenと發音されるのかも知れない。三五歳の時、シブトン隊のエベレスト遠征（一九三八

年）に加つたのが山に入つた最初だといふ。彼は今年ウオーラー（James Waller）等のマシヤールム遠征に参加し、手指を七本凍傷のために失つたバサン・プタール（Pasang Phutar）とは兄弟である。

他にチエツツ（Chettu）とタシ（Tashi）がいたが、二人ともC3まで登つてゐる。

では次に彼等の行動に移ろう。

① 前記

ギリオネ隊はKへのデジョオ隊と一緒に三月三十一日ゼノアの港を出たようである。最初は單なる調査を目的としてテリ・ガルワールを目指し、且つヤクを一頭連れ歸り、アルプスで飼養するなど發表されてゐた。が實はトリズールに登るが眞の目的であつたらしい。然し同行者が、四人も登られてゐる山に今更登らなくとも、といふ張つたので、結局手近かにあるアビーを選ぶことになつたのである。はじめから目的の地がグラグラしてゐたのでは結果のいゝ筈がない。この場合には頂上には登つたものの、後に述べるよう



にエライ結末となつてしまつたのである。

アビー遠征隊は四月二十五日にデリイを出發、十二日の困難な旅路の末にアビーの南麓に達した（五月七日）。

最初の致命的なアクシデントが五月の二十五日に發生した。カリー河の交流であるチャモリー河（Chamoli-ganga）に架る丸木橋を渡つてゐる時であつた。ビナミは殆んど對岸に渡り切るうとした。その直前ローブが手から離れたと思つたら足を滑らし、滔々たる濁流の中に落ち忽ち姿を消してしまつた。原因は丸木橋が少し濡れてゐたこと、ゴム底の靴にあるらしい。一行は九二日間ビナミの搜索を續けたが、リュックサックを拾ひ上げただけで、死體は遂に発見することが出来なかつた。之がそもそのケチのつきはじめである。

BCに達してから隊員は登路の偵察に従事し、六月十二日、五、五〇〇米にC2を設け、六月十四日、六、二五〇米にC3を建設した。

ギリオネはC4の設置を主張したが、バレンギーとローゼンランツは承知せず、頂上攻撃をこのC3から決行することになつた。之には歸國を急いでいた關係もある。ローゼンは試験に出るため六月二十八日から二十九日にはどうしてもイタリイに戻つていなければならなかつた。従つて遠巡してゐた彼の攻撃隊参加は最後の土壇場になつて決つた譯である。日に餘裕があれば頂上からチベット側

に入つて戻つて来ると云つていたという。

十四日の夜は天気が非常に悪かつた。十五日の朝、ギリオネは二人に天気が着着かないから充分氣をつけるようにいつた。二人はコーヒも吞まずに午前六時に出發した。

二人が出たあとでギリオネはコーヒを吞み、それからギアルゲンに二人の後を追うように命じた。ギリオネ自身は三、四時間彼等の足跡を辿り、大きな黒岩のあるところまで登つた。高度は約六六〇〇米である。こゝから彼は一時にC3に戻り、登行者の歸りを待つていた(ギリオネが登攀隊の事件を知つたのはB Cに戻つてからである)。

C3には彼の他、シエルバのチエツトとタシがいた。三人は夕方から夜中まで上へ行つたものゝ歸りを待つていた、とギリオネはいう。降雪はひどかつた。

十六日、C3隊は搜索に出かけたが誰にも遇わず、その上雪のため二度も道に迷つた。

十七日も探したが無駄であつた。いよいよ食糧も缺乏して來たので下ることにした。尚登攀隊が廻るかも知れないといつた他の谷の急峻な氷河地帯にも出かけてみたが徒勞に終つた。

③ 登攀隊の行動

之については生き残りのギアルゲン・ノルブに聞くより仕方がない。彼がダーシリンに戻つてから新聞記者に語つた物語りをこゝに御紹介しておこう。多少ギリオネの發表とは食い違ひがあるようであるが。

六月十四日はC3が設けられてからノルブは、頂上攻撃には他のシエルバ二名が加わることに、C4を設置することを申出た。ギリオネは最初の方の提案を斷り、C4設置に賛成した。然し之にはローゼンとバレンギーが反對であつた。

六月十五日、前記の通りバレンギーとローゼンはC3を六時に出發し、三十分後にノルブとギリオネが後を追つた。然し七十一歳の老人は暫らくして疲れ、ノルブ一人を上をやつて、自分はC3に下つて行つた。

ノルブは早く登るために自分のリュックサックを途中において行つた。八時頃先行者に追いつき、三人はノロノロと頂上に向つた。その日は恐ろしい日であつた。

霧が横つ吹きに吹きつけ、雲が激しく飛んでいた。頂上から二〇米ばかりのところへ來た時に、ローゼンは急に立停つて身體を横に振りはじめた。ノルブが彼のところへ近づくと彼はハーパー息をはずませ、その上鼻から血を出しながらグッタリとなつていた。

ローゼンとバレンギーは暫らく何か話し合つていたが、最後にバレンギーが病人をそこへおいて自分と一緒に來るようにと合圖した。ローブは外された。

二人はひどく悠くりと登り、正午を少し廻つた頃頂上についた。脚下には大きな霧のシートが白い毛布のように擴がつていた。ノルブはふと下を見るとローゼンが這い上つて來るではないか。ノルブは下りて行つた。バレンギーは少し寫眞をとつてから下りる

という。

ノルブがローゼンのところへ下りてみると、その容態は非常に悪かつた。鼻から出た血は凍りついてゐるし、眼は充血し、身體はガタガタ震えていた。

ノルブは驚いて頂上にいるバレンギーに呼びかけたが、風に遮られて聞えなかつたらしい。それから間もなくバレンギーは霧の中に消えた。それが彼の最後の姿であつた。

雪がひどく降りはじめていた。ノルブは降りしきる雪の中で、ローゼンを引つ張つたり擔いだりして行つたが、間もなく二人とも疲れ果て、もう一步も歩けなくなつてしまつた。

ノルブは雪を掘つてローゼンを腰かけさせ、血のめぐりを良くするために、彼の手足を擦つてやつた。その間、引續きバレンギーの方に向つて叫んでゐた。

ローゼンの手足を敲いたり、自分も凍りたくないので雪の中で足踏みをしたりしてゐた。

十六日、朝になると吹雪は一層つり、霧も深かつた。バレンギーは他のルートから下りたのであるから自分達も下つてしまおうとローゼンがいき出た。再び下降がはじめられたが視界が狭く、その上吹雪がひどかつたので直ぐ道を失つてしまつた。

その日は一日當てもなく放浪い、最後に狭い惨めな場所に腰を下ろし、お互いに抱き合つて温みを分け合つた。ノルブは相變らずローゼンの手足を敲いたり足踏みをしたりして夜を過した。

十七日、夜が明けて地平線に微かな赤味がさして來た。その時ローゼンがノルブに合圖をした。彼はひどく震えてゐる。兩腕に抱えられていた身體は段々冷たくなり、動きも少なくなつて行つた。かくてローゼンは「もう駄目だ、駄目だ」といふながら死んで行つた。

た。

ノルブは子供のよう泣き叫んだ。彼は小さな穴を掘つてローゼンの死骸を丁寧にその中へ入れた。彼は長い間ローゼンの眞青になつた静かな顔を凝視してゐた。眼は固く閉じ、口唇も青かつた。彼は泣いて泣いて泣き續けた。ローゼンは本當にいい人であつた。いゝ友達でもあつたからである。最後に彼はローゼンの上に雪をかけ、氷斧で十字架をつくつて樹てた。彼はローゼンの國の言葉を知らなかつたし、宗教上の習慣も知らなかつたので、手を合せ、頭を深く下げ、自分の神様に自分の言葉でお祈りをした。

かくて彼は獨りで下降を開始したが、新しい危険が待つていた。雪盲になつてゐたのだ。然し生きようとする意志は強かつた。すつかり弱つてはいたがどうしてもキャンピングに辿りつこうと決心した。自分の氷斧でゆつくり斜面に足場を切つてゐた。突然クレバスに落ち込んだが、ローゼンのリュック

一新着優秀スキー紹介—

★外國製スキー

エミール・アレー サイン入

フランス ロッシニオール

發賣元

ノルウェイ エリクセン

スイス ライメックス

スイス アッテンフォアー

ノルウェイ グレスビック

★國産スキー

西澤 マーシュウエスト

小賀坂 白 鷹

直井 スワロー

登山とスキー具の専門店

好日山莊

東京・中央区・銀座西二ノ五

振替口座 東京113657 電話(56)3600

クが裂け目にひつかうつて、それ以上の落下を食いとめてくれた。死者からの返禮でもあつたのであろう。漸く上に這い上つたノルブは茫漠とした雪の斜面を下つて行つた。

クレバスに落ちてからノルブは昼間の強い光線を受けて夜歩くことにした。弱い月光が山の輪廓を薄く浮き出していた。彼はノロノロと而も痛々しく尻滑りで行つて行つた。二時間許りしてC3を疾つづくに過ぎてしまつたことに気がついた。その時、手袋をはめた手に何かが當つたようであつた。之はC3とC2の間に立てゝある旗と旗とを結んでいる綱であつた。

之からはこの綱を傳つて行けばいいのだ、ノルブは全く疲れ切つて午後八時頃C2に辿り着いた。叫んだが誰もいなかった。勇敢にも彼は更にC1へ向つて下つて行く。間もなく湧水にぶつかると、貪るようにガブ／＼と呑んだ。彼はそこへ寝た。水が彼の神経を麻痺させたのである。

十八日、眼を覺したら丁度陽の昇るところであつた。尚C1へ向つて這い下りて行く。午前五時、ノルブはC1の見えるところまで來てぶつ倒れてしまつた。彼は三日三晩というものの飢と寒さに苛まれながら生き延びて來たのだ。友は彼を抱き上げ、温い呑みものをやつた。意識を取り戻した時に彼が最初に口に出した言葉は「パレンギーは着いたか」であつた。十九日、皆はC1を後にした。ブリー中尉が自分のピッケルで雪

盲のノルブを導きながら。

③ ギリオオネの意見

最初は隊を二つに分けて攻撃させる積りであつたが、それは出来なかつた。それにしても自分のいう通り、C4を張つていないなら遭難は免れ得たかも知れない。二人はアルプスでは一流の登山家達であつたが、ヒマラヤでの経験ははじめてであつたので、多分距離の誤測をやつたのであろう。

あの高きでは勿論酸素吸入器の必要はないが、それにしても過勞は禁物である。ローゼンの鼻血は最初餘りに早く歩き過ぎた結果に違いない。最大の誤謬は、三人が結び合つていたロープを、ローゼンの容態が悪くなつてから、ほどいてしまつたことにある。

パレンギーは頂上から姿を消したが、何處でどうなつたかは解らない。然し頂上から先に低い峰があつて、そこまで行けば向う側の谷が見下ろせるので、多分その峰を目指して尾根を歩いている内に突風に吹き飛ばされてしまつたのであろう。

C4の設置を拒まれた時に、何故登攀を中止せなかつたのか、という質問に對して彼は、一人は「充分に注意して戻つて来る」といふ他の一人は「危険はわかつてゐる、それでも行きたいのだ」とまで云われたのでは手の下しようがないではないか、といつてゐる。尚最後にギリオオネは、來年はグルラマンダータとカイラスに向うつもりである、と張り切つてゐたといふ。

K² 斷片——後報

頂上

・七月三十一日、C8(七九二五米)から頂上(八六一一米)まで胸をも没する深雪を漕いで十二時間かゝつた。到着時刻午後六時。頂上は百人位の人間が立てる程の廣さ。

・登頂前數時間は酸素がなかつた。

・約十分間滞頂、各々の寫眞を撮り合ひ、イタリーとパキスタンの旗を立て酸素吸入器をおく。第二登頂者のためとの報道もあるがそれは矛盾がある。空つぽのものを置いて來ても何ものならない。

・下りは酸素がなかつたので非常に危険であつた。

・C8着午後十一時、疲勞の極天幕の前でぶつ倒れてしまつた。

・後にK2をパシヤブルム(Pashabrum, 王ノ山)と命名しならし

登頂者

・イタリー隊について行つたパキスタンの陸軍中佐アタウラーはラウルピンデイーに歸つて來て(八月十四日)登頂者の氏名はヒラリー、テンジンの論争を繰返さないため暫らく發表しないだらうと語つた。

・隊長代理ウーゴ・アンゲリーノは登頂者の名前はデジョオ隊長がK²征頂記を書き終るまで發表されないと發表した。

・(ラホール八月三十一日)十五人のイタリー隊員はパキスタンのグラム・モハメッド總督から特別紋任式に招待され、山中で死んだ

マリオ・プロコズも餘榮に浴した。

・その際、隊員はお互いに登頂者の氏名を明かぬ約束であつたが、頂上に登つた二人は不注意にも秘密を打明けてしまつた。

・二人とはアキル・コンパニョーニとリノー・ラツエデリーである。二人は後の登山者のために酸素吸入器を頂上において來たと述べた。

・人夫の助力なしには登れなかつたにも拘らずイタリー人は、頂上に立つのは自分達だけだといふ張つたことに對し、快く思つていないとパキスタンの新聞は報じている。

・之に對しイタリー人はその事實を否定した。

・ウーゴ・アンゲリーノは、人夫のアミール・メーデー(Amir Mehd)はイタリー人と一緒に八二〇三〇米まで達したわけである。彼は凍傷のため頂上攻撃から落伍したのでといつてゐる。

その後

・スカルプー駐在役人が催した最初の公式歓迎會で、その地方での稀有な動物マコール(Machor)の頭が隊長代理のアンゲリーニに贈られた。

・登山班がラウルピンデイーにいたのは八月二十五日。

・K²に同行した七人の科學者は隊長デジョオと共にパルチスタンの氷河地帯(バルトロを含む)を十月まで踏査するという。この科學班の中には地形學者、石油學者、地球物理學、二人の地理學者及び醫者がいる。

(吉澤一郎)

マナスル映畫完成

一九五四年度マナスル登山隊は日活との提携により約八千呎の天然色映畫を撮つて來たがこの程、之が完成し、十一月末頃一般に公開される事になつた。

題名は「白き神々の座」と命名され、世界に未公開のネパールの自然、風物が多分に織込まれ、登山家にとっては勿論の事、一般大衆にとつても興味あるものと確信する次第である。

一般公開に先立ち、去る十一月十七日、日本橋日本相互ビル樓上に於いて秩父、高松の兩殿下はじめ、文部大臣、衆参兩議員諸氏、各國大公使を招き試寫會を催した。當日は會場狭きため會員各位を御案内申上げる事の出来なかつた事を本會として御詫び申上げると共に、公開の節は是非御鑑賞下さるよう御願する次第である。

ヒマラヤ委員會の解散

一九五四年度マナスル登山隊は去る七月末、最後の後發隊の歸朝後、數回に渉る檢討會を催し、一應解散する事となつたので右登山隊の計畫、實行に當り、之が最高の運営並びに監督をその任務として發足したヒマラヤ委員會も去る十一月四日の第十二回を以て解散する事になつた。

次回の、マナスル再舉の問題については去る六月九日の理事會並びに十月十三日の役員總會に於いて本會としては再舉する事に決議したが之が運営方法については更めて役員總會に於いてその方針を決定する筈である。



会員通信

八幡平から岩手山へ

村上金吾

十月八日午後小豆澤から入つて蒸(ふけ)温泉に一泊。翌日午前六時三十分蒸を出発、八幡平へ、昨日降った雪が残っており、アオモリトドマツは美しく霧水を飾っていました。頂上着九時。

それから奥羽分水山脈の尾根歩きはじまります。左下に藤七温泉を見てゆくと谷岳(もつこだけ)つぎに諸槍岳(もろひだけ)峻嶒森、大深岳、小谷岳とつづいて、かなり飽きる。普通の山道だとよく山頂を敬遠するが、このコースでは縦走そのものが目的なので例外なく頂上を踏むようにできています。三ツ石山を経て大松倉山との鞍部にある三ツ石山に泊る。季節がおそいためもあつてか、蒸を出て山荘までくると、人ひとり逢わぬ。むしろ三ツ石山も人のけはいなし。小沼の散在する湿原のほとり立ってられた美しい山小屋にひとり泊る。月のよい夜でした。翌十日午前六時山荘を出発、大松倉山、犬倉山、姥倉山を経て、黒

倉山の中腹をまいて大地獄に下り、火口原にある御釜湖、御苗代の神秘境を探ねると、あとは岩手山にのぼるばかり。九合目の不動平についたのは、豫定より遙かにおくれて午後三時すぎ。

その岩小屋に泊るつもりだったがにわかに温度が下つてきて土間にシラフ一枚ぐらいい一夜を過ぎそうもないので月明を幸いに瀧澤口の方へおる。三合目上の避難小屋で泊つて柳澤に出たのは、山に入つてから四日目の朝。

この山旅は一、五〇〇米前後から二、〇〇〇米までのピークが連続し、鞍部へおりるとネマガリにアオモリトドマツの深林、それに大小の沼が点在してミズガシワ、ウキガヤ、ミズバショウなどが多く、尾根に出るとミヤマハンノキ、ミヤマナカマド、それに草よりも、丈の低いハイマツ、ガンコウラン、コケモモなどが敷きつめています。夏は高嶺の花が研を競うことでしょう。時節がらキノコが多いのでないかと思いましたが、山ではスギヒラタケほか二三種を見かけただけ。これは針葉樹ばかりのためかもしれません。しかし蒸温泉で食べたサモタケ、カノカはおいしかったし、見本として頂いたアワビタケはめずらしいキノコでした。(十月記)

星仁一郎君の遺體発見

藤島玄

會報一七四號に報告の越後駒が岳で遭難した星仁一郎君の遺體が発見されました。

會員笠原藤七、高波吾策、伊倉

剛三君等を主とする捜索隊の活動も空しく、行方不明のまま偶然の機会を待つていたところ最初の豫想と正反對の北ノ又川で発見されました。

枝折峠から南東に北ノ又川へ延びる小尾根の末端の突起から出ている小澤がオリソ澤で、その上流の峠まで突上っているのが骨投澤です。この石抱橋から約一軒半程上流のオリソ澤落合上流に左岸から橋の太木が倒れて橋の様に對岸にかかり、枝は櫛歯のように川に立つていたそれに、最近の大雨に流れ出て引掛つたのです。

八月十八日、銀山平豊島林業の炊事夫上重福治さん外一名が岩魚釣に行つて、一時半頃発見し、須原口へ急行し小出署へ一時半頃電話で届出たので、星君の嚴父清左衛門氏、石澤署長、岡捜査係長、小千谷病院星野外科醫長外一名、米山村長、星助役、村民二十餘名が、トラック、ジープで枝折峠を越して急行し、檢視の後北魚沼郡湯ノ谷村の自宅に戻つたのでした。

十九日 県の解剖不用の指示あり、同日火葬。二十三日葬儀執行檢視によれば同死體は全裸體で遺品は全然無く、死後約三カ月を経過しており、前歯の特徴から、星君であることが確認されました。

今後死體発見上流附近の澤筋を尋ね、遺品が発見されれば遭難地は明瞭となりましようが、ここで二三の考察を試みるならば、

1 遭難當日下山を急ぐ餘り過つて小倉山を通過し、更に二三の雪の支尾根を乗越して主稜添いに降

つて行けば峠へ出るのを、支尾根の内側を巻いて銀山平側へ入る。2 違つたと氣付いた處は支尾根の末端に近い雪と藪の接點附近、時は日暮れで段々と風雨が強まり終夜荒れ通した。白澤右保・柳澤或いは骨投澤筋の支尾根である。

3 あらゆる努力も空しく、断崖又は澤の澤に落ちたか、そのとき頭部を砕いたか、又は春の底雪崩か。ともあれ全身の皮膚に傷のない事から、最近まで雪に埋められていたらしく、しかも離れた距離も短いと推察される。

星君の念願であつた駒ノ小屋新築も九月七日落成しました。同君も喜んでおられます。各位と共に星君の冥福を祈りましよう。

南アだより

山本朋三郎

新設の聖平小屋、赤石小屋、仁田池小屋及び開發された聖澤新コース、茶臼岳と畑蘆山を通る新コース調査のため十一月七日入山、昨日歸りました。以下小屋、コースの状況を書きます。

聖平小屋、赤石小屋は同型。五寸徑の丸太のアゼ倉作り。丸太のスキ間が目張されてなく(雪どけを待つて行ろ)今冬には一寸不適。仁田池小屋、一尺五寸の積雪のため人夫下山。聖澤廻行新ルート、ほぼ澤通しに作られ赤石澤から約四時間の行程。仁田池から畑蘆山を結ぶコース十一月三日に完成。池から茶臼の岩峯を静岡縣側に巻いて尾根へ出、畑蘆山へと山

道新設。來春更に手を加え仁田渡に架橋も計畫されている。光岳小屋、仁田池小屋、聖平小屋、赤石小屋、それに既設の百間洞、荒川小屋で南アルプスも遂々待望の天幕不用の縦走が可能になりました。(十一月十二日)

(一頁よりつづく)

締めくくりに見事に感じ入るばかりである。山へのアプローチ、山へかゝつてからのタクティックスなどについては、触れなかつたが、こゝに取上げた點だけをみて、サ・ジョン・ハントの隊はエヴェレスト初登頂の榮譽と幸福とを享ける資格を充分にもつた、立派な遠征隊であつたと、しみじみとおもわずにはいられないのである。

藤島敏男

—ナイロン、麻、綿製—

各種テント、リュック、アノラック、

ザイル、スリーピングバツクの専門店

三 喜 産 業

東京都千代田区大手町2-4

電 和田倉 (20) 4810.4984.4985

図書紹介

Bergsteigen

會報一七四号「Bergsteigen」を紹介したが、それがオーストリア山岳會の七十五周年の記念誌であり、かつまた會報の一七三號（一九五四年一月二號）を兼ねていた。

その後、一二七四號（三四月號）一二七五號（五月六月號）一二七六號（七月八月號）の三冊の會報が會に寄贈された。これで分る様に現在は隔月に出ているらしいが、こで一寸不思議な事は七十五年間に一二七〇號以上も出ていないけれども、昔は月に二號近く出ていたけれども、勘定になる。平均三十數頁で、紙質は極めて上等、印刷も良い。一見して感ずる事は前の記念號同様、二葉の地圖、概念圖、カットの類は一切入っていない。しかもドイツ人らしいいきなり白く染み込んで追込んである。廣告も表紙裏だけである。

それから餘談になるが、この會の會費は年約千円らしい。會員には會報が送られる外どんな特典があるのか知らないが、この點だけについて云えば日本山岳會の會報と「山岳」を合わせたのと同じ位のヴォリュームがあるから、丁度實質的にも同じだと云えるだろう。さて會報の内容だが、一二七四

號（三十九頁）は、先づ五十三年末に行われた七十五周年祭の様子が述べられ、當日の祝辭と議事録と祝祭の寫眞が載っており、また出席者のサインがやはり寫眞版で載っているのも面白い。

ついで「アラスカの山旅」としてアメリカの在住會員に依る紀行が例のオシユバンの寫したマツキンレーの寫眞と共に載っている。次に「山都ミュンヘン」と題する隨筆があり、これで本文的な處を終り、後は五十三年度の會務報告に數頁をさいている。

更に「五十五年度」のアルプスの新山行について次號にも亘つて興味のあるリストが載っている。この新山行と云う意味が本當の初登攀を云つていいのかよく分らないが、若しそうだとしたら實に多數の初登攀が行われ、従つてまた未登の場所が非常に多く残されている事を暗示している。山は何れも二千米前後の低い山だが、北壁とか西稜とか斷つてあるから何れも岩登りだけであろうが限られた日本の山登りから考えると羨しい限りである。

最後に「世界の山」として主にヒマラヤの情報が集められ、これは毎號續けていく様である。七十六号のこの項目には我々のマナスル隊の記事も載っている。

以上が七十四号の見出しだけの内容だが、次の二つの号も同じ様なもので、登攀記録又は紀行文が二つ三つ、隨筆が二つ三つ程度が本文である。尚七十五號には「Gesänge」案内と云う本の新版に就いて巻頭に述べられており、本の申込書がさし込んである。但し

約二千元と云う高いものだ。この「Gesänge」地方は東アルプスの東端の山々の事で、この會の人々がよく登りに行く山らしい。

とにかくこれ等の會報を読んで見て感ずる事は、流石長い歴史を有するだけあつて、落着いた堅實なそして教養ある會員を基として編集されているという事である。（戸野昭）

寄贈 図書

大谷家藏版 新西域記 上・下巻
The National Geographic Magazine Dec. 1936—Dec. 1941.

以上 別宮貞俊氏
Jahresbericht Nov. 1952—Oktober 1953

ベルン學生山岳會
エリ・エス・ベルグ著 小場有米
譯、カムチャツカ發見とベリリ
ング探検 貴堂武時氏
荒木俊馬著 吾輩は水である
小島島水著 偃松の匂ひ
以上 吉田武志氏

デリー氏の急逝

一九五二年以来三回に渉るマナスル登山隊の通譯として本會のために絶大な支援を惜しまれなかつたデリー氏は去る九月、フランスのマカルー遠征隊の通譯として現地地活躍中、ベースキャンプに於て肺炎のため亡くなられました。

同氏と行を共にした日本隊員は勿論の事、本會としても同氏がマナスル登山隊のために盡された献身的努力を想い痛惜に堪えず、

ただ通譯としてでなく、よき隊員を失つた感が濃い。慎んで哀悼の意を表する。

クリシュナー氏を送る

滞日二年、本邦各地を旅行見學され、又本會のマナスル登山のため終始御盡力下さつたクリシュナー・バハドール氏は今回令弟デリー氏急逝の報に接し、十月二十五日羽田發の飛行機で、多數山岳會關係者の見送り裡に歸國した。本會では同氏の歸國に先立ち同好の士一堂に會してユツクリお別れの會を催し度いと考えていたものであつたが、突然のことゝてその餘裕もなく十月二十三日（土）芝区三井三井會館に山岳會關係有志者相集し送別の會を催した。當日は横會長の送別の辭と三田前隊長の送別の辭（生憎病床中のため松方副會長代讀）があり、出席者約二十五名、一同記念撮影の後、色紙に出席者一同署名して同氏に進呈した。

尚、令弟デリー氏の死去に對する哀悼のしるしとして隊員各位ヒマラヤ委員會各位に對し離金を願ひ、過古三年に渉る御盡力に對し聊かながら感謝の意を表した次第であつた。

エベレスト寫真本會へ

英國領事館では今夏日本橋丸善その他全國主要都市でエベレストの寫眞展を開催したが、一段落をつげようとして今回丸善の御紹介により同館より右寫眞約百枚が本會宛に寄贈された。

一九二一年以来九回に渉る英國登山隊の撮影による誠に貴重な資料であり、本會と致して茲に改めて英國領事館並に丸善に對し感謝の意を表すると共に、會員諸氏にお知らせする。

K² イタリアヤ登山隊へ祝電

K²の登頂成功に對し本會では早速本國宛祝電を發し、同時に日高副會長が在日イタリア大使館を訪問、祝辭を傳えた。

チヨールオー登頂への祝電

今回オーストリアヤ登山隊のチヨールオー登頂成功に接したので本會よりは直ちに同國山岳會宛祝電を送つた。

スキーとカメラ

酒井菊雄著 B6クロース
共一〇頁
【發賣中】定價二八〇円

著者獨得のカメラとペンによつてツアリスキーの妙味を記し、またことに滋味あふれる快書がある。

山とカメラ 酒井菊雄著

夏の山冬の山 小島六郎著

山小屋の窓 長尾安也著

山の味谷の味 冠松太郎著

山の饗宴 黒田初子著

雪の祭典 高橋喜平著

書店品切の場合直接注文
東京牛込區早稲田町四二
振替口座東京四二〇二二三

圖書基金寄附(敬稱略)

- ▼壹萬圓 松方 三郎
▼壹千貳百圓 日大山山岳部
▼壹千圓 石川支那、磯部三郎
▼七百圓 濱野 正男
▼四百圓 立教山岳部
▼貳百圓 森谷昭男、田邊 壽、日高信六郎、中央大學
山岳部、重村傳平
▼壹百圓 松田雄一、岡本丈夫、原 滿紀
◆累計金壹萬七千圓

マナスル基金芳名(敬稱略)

- ▼參千圓 山形山岳會、酒田山岳會、鶴岡山岳會
▼壹千圓 山形山岳連盟新庄山岳會、牧野 衛
▼五百圓 井上 守
◆累計金八萬二千五百八拾圓

會務報告

九月役員總會

九月八日(水)於ルーム
出席者、日高副會長、理事、成瀬、交野、渡邊、小原、金坂、沼倉、折井、初見、千谷吉阪、評議員、岩永、沼井、別宮、神谷、監事、石原

議事
一、九月十二日支部長會議開催の件

一、國體委員會の件——新たに國體登山行事運営に關する委員會を設け事務處理の圓滑を計る事とし追而委員を任命のこととす
一、書庫建設の件——五十周年記念事業計畫とにらみ合せて再検討のこととす

報告

一、ヒマラヤ研究會開設の件
一、ヒマラヤ登山隊殘務處理の件
一、月例會計報告

十月役員總會

十月十三日(水)於ルーム
出席、模會長、日高副會長、理事、成瀬、交野、渡邊、沼倉、小原、初見、金坂、外山、千谷、折井、評議員、岩永、沼井、別宮、神谷、津田、今西、伊藤(秀)竹節、支部長、高山(信濃)織田(山陰)

議事
一、マナスル再舉に關する件

資金の見透しさえつければ本年のサマ問題の解決の件を含めて再舉遠征隊の派遣を期したい
一、體協加盟團體として國內各山岳團關との連絡組織擴充に關する件
體協加盟以來懸案となつてゐる標題の件に關しこれが早急に考慮の要あり、特に國體行事運営に際しては全國的組織の擴充について不備の點を生ずる事もあるので早急に對策をたてることとする。

報告

一、五十周年記念事業企畫委員會報告(交野)
一、山梨縣體育祭登山行事參會の件(神谷)

一、土樽村公民館主催登山講習會講師派遣の件(金坂)

一、秩父宮立山登山三十周年記念會參會の件(模)

一、ヒマラヤ委員會報告(模)

一、月例會計報告

支部長會議

九月十二日(日)於ルーム
出席、本部、模、日高、松方、成瀬、渡邊、交野、金坂、小原、千谷、今村、初見、折井、外山、三田、沼井、別宮、神谷、石原、支部長、三井(山梨)篠田(關西)藤島(越後)池田(石川)中田(富山)杉本(東京)谷口、林(和)

全岳連問題、五十周年記念事業、本支部間の連絡等につき懇談し、各支部よりの現況報告あり、今後年にくくとも一、二回開催の事とすることに決定。

第十一回ヒマラヤ委員會

十月十日(日)於ルーム

出席、模、松方、日高、早川、竹節、堀田、成瀬、谷口、千谷、小原、吉阪、神谷、岩永、初見、沼井、交野、石原、村井(今)回は都合に依り役員總會を併合開催す

議題

一、堀田隊長報告
一、裝備品の保管並に一部處分の件

一、サマ問題の處理
一、現ヒマラヤ委員會解散の時期
一、本年度遠征經理報告に關する件

一、ヒマラヤ映畫「白き神々の座」完成に關する件

富山支部便り

故秩父宮の御遺徳を讃え、立山御登山三十周年を記念して、模會長にお骨折を願つて秩父宮勢津子、高松宮喜久子兩妃殿下を迎え、富山縣と共催で九月二十七日より三十日まで諸種の記念行事を行つた。

九月二十七日 午後八時二十五分富山驛着急行で兩妃殿下、模會長、前田富山藩主、島津日赤社長、の御一行御來富、富山市電氣ビルに御宿泊。

二十八日 午前八時五十分地鐵富山驛發、十時十分立山驛より立山ケーブルにて美女平に着かれ、それより縣觀光道路(本年は弘法迄開通)をシブで刈安谷の瀧見臺附近まで進まれた。支部よりは中田支部長、佐藤、牧野兩顧問が御同行し色々御説明申上げた。折悪しく雨天であつたが美女杉の美林、ブナの純林に流れる霧の風情

は仲々感興を深めた。午後一時半美女平發、同三時半富山御歸着。同夜六時より富山支部主催の晩さん會及秩父宮をしのぶ夕の座談會を北陸銀行禮部寮で行い、晩さん會には山岳會より模會長、中田支部長はじめ佐藤、牧野支部顧問、高辻富山縣知事、成田副知事、富川富山部長等夫人同伴にて同席、故秩父宮殿下の御遺影を圍んでなごやかに行われた。午後八時より同所で故殿下をしのぶ座談會に移り、富山支部役員、故殿下御登山當時の隨行員、ガイドの生存者志鷹光次郎、山麓での御宿泊所の主婦佐伯のぶ等四十數名が出席し、中田支部長司會のもとに、ま

づ模會長が當時の懷古談を詳しく發表され、特に我國積雪期登山の草分であることを強調された。妃殿下も當時の殿下をしのび眼をうるませていられた。續いて御登山當時の寫眞二十數枚をスライドにして映寫し、夜のふけるのもお忘れの如くお話しされた。

二十九日 午前九時、兩妃殿下は模會長と共に電氣ビル五階にある富山支部のルームにお成りになり、會員とも親しく言葉交され、記念撮影の後、翌日歸京された。(若林)

昭和廿九年十一月卅日發行

東京都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會

編集者 渡邊 公平

電話 神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港區赤坂池五番地
印刷所 株式會社 技 報 堂